



無所属・無党派

発行者：さいたま 変革の会

川村 準

じゅん

4月27日号

〒336-0017

南区南浦和2-28-9-102

携帯 090-1404-2151

junkawamura1923@gmail.com

活動レポート

市議会

「無所属」は私含め2人だけに 多くは民主と合流へ

先日のさいたま市議選では定数60議席のうち、自民党22人、民主党12人、公明党11人、共産党8人、無所属7人となりました。

ところが無所属7人のうち、1人が自民党に、4人が民主党と合流しました。しかし、私は今後も生粋の無所属で議員活動を行っていきます。

清水与党の2会派が合併

右に述べましたように、今回の選挙では無所属が7人当選しました。

しかし、そのうち一人は無所属でしたが、自民党からの推薦を得ており、当選後は自民党の会派に所属するようです。

民主と合流した4人は、元々「改革フォーラム」という会派に所属していました。この会派は、左派から右派の考え方の議員まで入っている会派で、清水市長与党です。

そして、民主党も

清水市長与党で、今回「改革フォーラム」が議員を減らしたこともあり、考え方が同じこの2会派が合併して「民主改革」としてやっていくようです。

しかし、自民党も共産党も大筋では清水市長の議案に賛成することが多く、すべての会派が「赤字

ハコモノ」賛成、「政務活動費」も従来通りの使い方に賛成、となっています。

私は他の会派と異なり、清水市長の議案に何でも賛成するのではなく、ダメなものダメ、進めるべきは進める、といった態度で毅然として議員活動を行って参ります。

ポスト欲しくて 会派へ所属？

会派に入ると、その議員が他の会派にこの会派のドン意向に従わざるを得ません。本心では「赤字ハコモノ」は反対

私には、勲章・ポストなどは要りません。住民の立場にたって自由に物を申すため、私は「無所属」として自分の信じる政策を市にぶつけ市民生活を改善するため尽力します！

そんな自分の政策に反してまで、会派に所属する議員が多いのはなぜなのでしょう。実は、会派に所属すると、議長や委員長職などの高いポストが手に入りやすくなります。また、議長になると天皇陛下から勲章も授与されます。

無所属に発言時間を 10分→3分の変更は問題！

私のさいたま市議会議員の任期は5月1日からです。5月1日に、議長や議員の所属する委員会を決定する臨時議会が開催されます。

その後は、通常の議会が3か月に一回、つまり2月、6月、9月、12月に開かれます。このことは、3か月に一回の議会の出席で1300万円の高給はおかしい！と以前(2月9日号)のレポートでも述べさせていただきました。

2月議会でルール変更

それに加えておかしいのが、議員の討論時間です。3か月に一回しか議会が開かれないうえに、議員は討論時間を制限されているのです。その討論時間は1議会につき会派ごとに「9分+会派に所属する議員数」。自民

党議員は無所属1人が合流し、今回23人です。無所属議員は、1人会派と考えられ10分。ところが、この討論時間が一番直近に開かれた2月議会で大幅に変更されたのです。会派ごとに「3分×会派に所属する

議員数」。つまり、自民党は69分。対し

少数派の意見も尊重を

現在、5月1日の臨時議会に向け水面下の調整会議が開催されています。

私はその会議で、無所属議員が少数派

であることにより、討論時間が少なくなる今回の改革は大問題だ、と問題提起しました。

議会の決定は、多数決で決めるべきですが、議員が意見を表明する討論時間は、多数派・少数派と数の論理に縛られず平等であるべきです。

て無所属議員はわずか3分です。このルール変更は問題だ、ということでも2月議会当時、私もルール変更を止めるよう請願を提出しに

回りました。しかし、当時の無所属議員ですら請願を引き受けず、ルール変更は通ってしまいました(3月3日のブログ参照)。

もお待ちしております。『②カンパお願い』「さいたま変革の会」はカンパをお願いしています。ゆうちょ銀行・振替口座(当座)00170191386914「さい

私は今後も、少数派の討論時間を守るため、議会で声を大にして闘って参ります！

【ご連絡】『①サポーター募集』川村の政治活動を手伝ってくださる方を募集中です。メール(表面記載)へご連絡ください。ご意見

お待ちしております。③本レポは立つ駅を増やした関係で、今後は基本的に2週間一度配布します。今後よろしく

「さいたま変革の会」代表 川村準のプロフィール じゅん

1987年11月生まれの27歳。旧・浦和市の大牧小学校、尾間木中学校、都内の私立・順天高校を卒業後、渡米。2007年ノースイースタン州立大学(米国・オクラホマ州)に入学し、歴史を専攻。留学中に、米国人を始め自国の文化に誇りを持つ多数の外国人と触れ合い、日本のあり方を考える機会に。2011年に卒業後、浦和に戻り、工業系新聞の記者になりました。記者の調査能力を生かして、市政の問題点を勉強しています。